

インドネシアの地方政治

— 西部ジャワの事例 —

こ とう けん いち
後 藤 乾 一

はじめに

I 社会経済的背景

II 若干の政治文化的特質

1. イスラム
2. スンダ族

III 中央の政治過程と西部ジャワ政治

1. 第1回総選挙と西部ジャワ
2. 西部ジャワの地方政党
—— バルキの事例 ——
3. 総選挙後の中央政治の変動
4. 中央の政治指導層におけるスンダ族の地位
5. スンダ族アイデンティティの模索
6. 地方選挙と西部ジャワ政治
7. 中央集権化と西部ジャワ政治

む す び

はじめに

戦後、政治的独立を達成した多くの東南アジア諸国、とくにインドネシアについての政治研究は、中央レベルでの政治過程に分析の力点がおかれてきた。このことは独立への過程とその後の発展を国民統合を目指す民族単位の運動であるとする基本認識から、戦後研究が出発したことをふり返る時、ある意味では当然のことであった(注1)。

しかしながら、近年インドネシア国内において——とくに1965年9月30日後の政治的変動が一定の方向にむかって「秩序化」されるにつれ——国民の一体性とそれを構成する個々の地方的種族社会の個性の発揮とは、決して矛盾するものではないとする認識に基づいた「地方」ないし「地方史」

(いわゆるサブ・ナショナルなレベルでの)研究への要請が高まってきた(注2)。

このような基本的方向をふまえつつ、筆者が地方レベルでの政治を論じるのは、(1)国民統合形成の過程において、ナショナルな重要性をもつ歴史的、政治的事象についての評価は、中央レベルと地方レベルとは、必ずしも同一ではないこと(注3)、(2)したがって中央政治の変動の性質と方向を予測していくうえで、地方レベルでの政治の構造と動態を理解することが、有効な補助手段たり得る、という認識に基づいている(注4)。

以上の観点にたつて、筆者が西部ジャワを取り上げるのは、まず(1)同地方のもつ地政学的重要性が中央政府の政策決定過程に大きな影響力を及ぼし得る、(2)同地方の人口約1800万のうち、ほぼ4分の3を占めるスンダ族は、全国でもジャワ族に次ぐ人口をもつ種族であり、その政治的忠誠心は基本的には「インドネシア」を志向しながらも、絶えず「スンダ」的なるものへの——特に文化面において——帰属意識を伴っている、(3)政治文化(第II章参照)の型において、西部ジャワはジャワ島内に位置しながらも、外島特にスマトラ主要地域といくつかの点で類似性を示しており、中央対地方の関係をみるうえで一つの手掛りを提供する地方であり、かつ(4)従来、その重要性の割には個別研究が十分にはなされていなかったこと(注5)等の理由によるものである。

また、第1回総選挙後の1950年代後半を主な対象期間としたのは(第Ⅲ章)、この時期が本稿の主題とする中央と地方の相互関係を見ていく際、最も重要な時期の一つと考えられるからである。すなわちこの時期に、中部スマトラでの反中央政府運動にみられるごとく、全国的に単一共和国制の理念が危機に直面し、その中であってスンダ族社会も(前記①~③の要因が絡み合い)深刻にアイデンティティの模索を行なった。

(注1) その代表的著作として Kahin, G. McT., *Nationalism and Revolution in Indonesia*, Cornell Univ. Press, 1952.

(注2) 1970年初、ガジャ・マダ(Gadjah Mada)大学歴史学者が主催した歴史学セミナーは、そうした傾向を端的に示したものであり、次のような興味ある論文が提出された。Sartono Kartodirdjo, “Meneruskan Langkah kearah Dekolonisasi Historiografi Indonesia” (「インドネシア歴史学の脱植民地化にむけ絶えず前進を」), Soetjipto, “Beberapa Tindakan tentang Sedjarah Local” (「地方史に関する若干の考察」)。また近年の業績の一つとして、M. D. Mansoer ら5人の若い歴史学者が著した *Sedjarah Minangkabau* (『ミナンカバウ史』) (Bhratara, 1970) は、地方史研究の先駆的役割を演じるであろう。同様、ミナンカバウ現代史を精力的に研究している T・アブドゥラ (T. Abdullah) の一連の論文も注目されよう。たとえば、かれの “Adat and Islam: An Examination of Conflict in Minangkabau,” *Indonesia*, No. 2 (Apr. 1966), pp. 1-24. その紹介については、増田与『インドネシア現代史』(中央公論社 1971年) 第7章を参照。

日本、欧米のインドネシア研究者の間でも地方研究の必要が叫ばれている。日本では政治変動を解明する手掛かりとして地方指導層の役割に着目していた長井信一の C・ギアツ (C. Geertz) 紹介論文がある。石田雄 長井編『インドネシアの権力構造とイデオロギー』(アジア経済研究所 1969年) におさめられている長井「インドネシアの地方指導層に関する覚え書—東部ジャワ地方の事例を中心に」(165-182ページ)。「中部ジャワ地方指導層の背景——ジョグジャカルタの事例」(183-203ページ)を参照。欧米においては、たとえば、H・フィース (Feith) は1969年の豪州政治学会

年次総会で “The Study of Indonesian Politics: A Survey and Apologia” と題する報告を行ないその中で従来のインドネシア研究で十分でなかった分野として「Provincial Studies」を第1に指摘している。

(注3) この点については、「インドネシア革命」のもつ意味が首都(中央)レベルと、州都では異なるものであるとの鋭い指摘を行なった J. Smail の *Bandung in the Early Revolution, 1945~46: A Study in the Social History of the Indonesian Revolution*, Cornell Modern Indonesia Project, 1964 がある。

(注4) この点については、ギアツに代表される文化人類学者の基底レベル(特に中、東部ジャワ)での研究成果が、1965年9月30日事件後の政治、社会変動の分析に際し有効な方法を提示しているという背景がある。特に Geertz, C., *The Religion of Java*, The Free Press, 1963 を参照。

(注5) 個々の業績については本文参照。

I 社会経済的背景

西部ジャワの地方政治を、中央レベルとの関連で論じる際の予備的作業として同地方の社会経済的背景を考察しておきたい。そのための一つの手掛りとして、ここでは西部ジャワの土地所有の形態について概括的な展望を行なう。

一般的に、中部、東部ジャワのジャワ族村落と比較すると、西部ジャワにおいては土地の共同体的所有は著しく少なく、また同地方の中心プリアンガン(注1)においては少数の地主への土地集中の傾向がとりわけ顕著である、と指摘されている(注2)。こうした差異が生じたおもな理由として、西部ジャワ、スンダ族村落 (Kalurahan) は、拡大血縁関係に基づくものであれ地縁関係に基づくものであれ、強固な Corporate group (共有集団) が未発達であったこと(注3)、オランダによる植民地化過程において、その勢力下にはいった伝統的慣習首長の権限が永く温存されたこと等の史的発展の特殊性に求められよう。

17世紀末、オランダ東印度会社がプリアンガン

地方に勢力を扶植する以前、同地方の人口は極めて稀薄で、しかも農業は住民の移動をともなう焼畑耕作が主であった。こうした諸条件のため、スンダ族村落は共同体としての規制が弱く、それは村落首長 (lurah) の権限下におかれた個々の農民の単なる集合体にすぎなかった。すなわち、住民は居住地の変更、したがって圧迫や搾取がはげしい時、居住地を変え、首長を選択することを妨げる外的要因に束縛されることが比較的少なかった。換言すれば、スンダ族の村落は、選任された首長の支配下で自らの集团的利益を追求し、権利・義務を遂行するような自立的土地単位ではなかった。こうした土地に対する共同体的権利・義務の伝統的な弱さ、さらには18世紀以降の東印度会社によるコーヒーの義務供出制やそれに引き続くプリアンガン制度^(注4)の時代を通じて温存された伝統的慣習首長の地位と権限^(注5)、その下で定住化を強制されていった農民の負担増等の諸条件により、西部ジャワでは土地所有の集中、土地なき農民の創出が可能となる基盤が19世紀半ば頃から徐々に形成されていた^(注6)。

こうした社会経済的諸条件を背景とし、1870年代に至ると、西欧資本が西部ジャワにおいて茶、コーヒー、タバコ等の大農園経営に着手し、またかれらの利益に合致する方向で地方行政制度を再編成するなど^(注7)、大規模な変動要因が社会に導入され、農民間の分化を促進した。貨幣経済の浸透により農産物ならびに土地の商業的価値が著しく増すにつれ、富裕な土地所有者は荒蕪地を開墾したり他人の土地を併合したりすることによって、より多くの土地を獲得するよう努めた^(注8)。

さらに今世紀にいたり、特に大恐慌後の1930年代において土地所有の大規模な移転と農家負債の増大により大土地所有階級が産み出されるように

第1表 ジャワにおける土地所有分布：農家数比 (%)

	0.10~0.49ha	0.50~0.99ha	1.00~1.49ha	1.50~1.99ha	2.00~2.99ha	3.00~3.99ha	4.00~4.99ha	5.00ha以上に上*
西部ジャワ	56.05	24.42	10.06	3.88	3.46	1.07	0.50	0.55
中部ジャワ	52.55	27.90	10.53	4.34	3.02	0.97	0.39	0.31
東部ジャワ	48.06	28.79	11.85	4.98	3.98	1.35	0.52	0.47
インドネシア全体	44.66	26.50	12.51	5.38	5.37	2.17	1.12	2.28

(出所) “Agricultural Census 1963,” in *Nugroho Indonesian Facts and Figures*, Djakarta: Terbitan Pertjoabaan, 1967, p. 236 より算出。

(注) * 1960年農地法により、人口密度 (平方キロ当たり)400人以上の地方では土地所有の上限は5haとされた。

なり、この傾向は植民地支配の影響が社会深部にまで浸透していたプリアンガン地方で特に顕著であった^(注9)。

西部ジャワにおいて、土地所有の形態という観点からみた分化が進行し、かつ地主階級が形成されていたとする上記の論議を裏付けるに足る十分な統計、調査はないが、政府発表の公式データ、ならびにプリアンガン地方で行なわれた二つの農村調査の結果から若干の手掛りを得られるものと思われる。

第1表は1963年農業センサスに基づくジャワ各州における土地所有状況を示すものだが、西部ジャワにおいては、4ヘクタール以上の土地を保有するグループとわずか0.01~0.49ヘクタールを保有するにすぎない零細土地所有者の割合がいずれも他のジャワ地域より高いことを示している。

村落レベルでの土地所有状況に関しては、既に1946年、内務省一般調査局による土地調査がジャワ各地で実施されたが、ここでは独立後プリアンガン地方でなされた二つの実態調査の結果を簡単に紹介することにする。この種の学問的調査の最初のものとして、1951年オランダ人H・テン・ダ

ム (H. ten Dam) がプリアンガン、チボダス村 (人口約5000名) で行なった社会構造調査がある。同村においては、全体のわずか13%にあたる戸主が全土地の82%を所存する一方、残り18%の土地を548農家が所有し、その平均面積は0.26ヘクタールにすぎず、また564名の農民は土地を全く所有していない。換言すれば、チボダス村においては全戸の87%が零細土地所有者ないし土地をまったく所有していない階層を形成している。さらにダムは全体の13%の土地所有農家を分類し、5ヘクタール以上の大土地所有者は2.5%、残り10.5%は1~5ヘクタールの土地所有者であるとしている。第1のグループはチボダス村の6人の有力者からなり、その平均所有は55ヘクタールに達するとされる一方、第2のグループはダムの用語でいう独立農民 (Independent farmers) の中核を形成している^(注10)。ダムは以上のようなデータを紹介しつつ、その報告論文の中で、農民は単に土地の所有状況によって二分されているだけでなく、この2集団は相異なる世界観に基づいた行動規範を持つものである、と述べ同村内部の二重構造の特質を指摘した。

日本人の手による調査としては、1960年代初期に増田与がプリアンガンの中心、バンドゥン市近郊のクンチャナ村 (仮称) で行なったものがある^(注11)。クンチャナ村の家族数は700戸、人口は約5000名、その耕地面積は水田170ヘクタール、陸稲畑60ヘクタールとなっている。同村の分析に際し、増田は1954年に *Bintang Merah* 誌で紹介された階級分類に従い次のような結果を得た。すなわち、(1)在村の大地主は同族関係にある3人で、この一族だけで全水田の3分の1を所有している。不在地主はバンドゥン市やガルト町に住む13人の軍人と官吏である。その他5人の在村の小地主がいる。

(2)富農は村に10人いる。かれらの平均土地所有は2ヘクタール以上3ヘクタール以下である。(3)中農は村人口の15%で平均して0.5ヘクタール前後の土地をもっている。(4)貧農は村人口の約20%で、土地を持たず1ペタから3ペタ (15ペタ=1ヘクタール) の水田を地主から借りる。半年から10カ月位までの間を労働者として村外に働き口を求める。(5)村人口の60%を占める雇農は、まったく土地を持たない。かれらは農家に雇われて働きに応じた収穫物の配分にあずかる。村に仕事があれば町にでかけて労働者になる^(注12)。

以上、簡単に触れた西部ジャワの社会経済的背景——二重構造的特質——は、政治的文脈の中でどのように理解されるのであろうか。われわれが二重構造ということばから一般に類推するのは、それがおうおう、社会不安の要因となり、政治的対立へと顕在化していくであろうということである。しかしながら、西部ジャワにおいては、こうした潜在的な不安要因が広範な規模にわたり顕在化したことは——少なくとも中、東部ジャワに比べて——少なかった。この点に関する十分な分析は、今後の課題として残されるが、一つの仮説として西部ジャワにおいて、上記のいわば“持つもの”と“持たざるもの”の間の“階級”的亀裂を防ぐより強い社会的同質要因の存在、すなわち“階級”を縦断してみられる生活規範化されたイスラムの影響力が指摘されよう。

後章でみるごとく、サントリ (敬虔なイスラム教徒) 層が優勢な西部ジャワ、特に農村社会では、メッカ巡礼に対し伝統的に高い名誉が与えられており、大土地所有者をはじめ社会各界の富裕な人々は自らの篤信を示すため、あるいは社会的威信を増加する一手段として積極的に巡礼に参加し、西部ジャワ農村社会におけるイスラム指導層と富農

層との緊密な関係を作り出す前景となった^(注13)。

西部ジャワにおける富裕な土地所有者とイスラム指導層との間のこうした親近性は、1965年のいわゆる9月30日事件前にインドネシア共産党(PKI)が激しく攻撃した対象の一つでもあった。PKIは神政イスラム国家の樹立を目指し、プリアンガン各地で暴威をふるったダルル・イスラム運動と最大のイスラム政党であり西部ジャワ農村社会を強力な支持基盤とするマシュミを同一視し組織活動を行なった。9月30日事件前夜「農村の七悪魔」^(注14)を攻撃しつつ、PKIはイスラムと地主階級への態度について、「農民は愛国的、反ダルル・イスラム的かつ土地改革と穀物分配法に頑固に反対しない地主と、外国の転覆活動に積極的に加担し、かつ反革命的人種活動を促進する地主を区別し得る」と言及した。このキャンペーンにおいて、後者のグループとして1960年に非合法化されたマシュミ、インドネシア社会党(PSI)が非難の対象となったことは、党議長D・N・アイディット(D. N. Aidit)の論文「農民は村の悪魔を粉砕する」の中で明らかにされている^(注15)。しかしながら、PKIがこのように地主階級を二分しなければならなかったことは、農村社会におけるイスラム勢力の強靱さを暗示的に語るものであろう。

西部ジャワ農村部に残存するダルル・イスラム運動への恐怖感を利用したり、いわゆる「一方的行動」^(注16)における農民のための平等な土地分配の要求運動にも拘らず、PKIはこの地方で幅広い支持を獲得するには至らなかった^(注17)。逆にイスラム諸集団への批判は、篤信な農村社会一帯の同質的風土を騒乱させるものと反撃され、かえってイスラム勢力と大土地所有者との間の既存関係を強める結果をもたらした。PKIによる大土地所有階級への攻撃は、貧農層を政治的に覚醒させると

いうより、往々にして村落レベルにおける伝統的絆である慣習化イスラムそれ自体への挑戦と受け取られ、共産党支持者即無神論者の烙印を押され結果的にはかれらが社会の内枠から——少なくとも短期的には——はじきだされる一因となった。

(注1) Priangan (蘭語式には Prianger)。同地方に古くから伝わる呼称バラヒヤンガン(Parahijangan)もよく使用され、バンドゥン、ガルト、タンクマラヤ、チアミス、スメダン、チアンジュール、スカブミ、ボゴール地方を包含する。

(注2) この問題を扱った戦後の主たる研究としては Alisjahbana, S., *A Preliminary Study of Class Structure among the Sundanese in the Priangan*, Cornell Univ. MA Thesis, 1954; Palmer, A., "Situradja: A Village in High Land Priangan," in *Villages in Indonesia*, ed. Koentjaraningrat Cornell Univ., 1967.

(注3) 西部ジャワにおける共同体志向の契機が稀薄であることを示す一例としてアリシャバナは、墓地、宗教学校(pesantren)あるいは村落寺院(tadjug)が主として個人単位の寄金に依存していることを指摘している。Alisjahbana, *op. cit.*, pp. 46-47.

(注4) 同制度は1818年に導入され、レヘント(県長)を中核とする土着貴族階級に徴税権(財、用役、貨幣形態での)を認め、かれらの住民に対する権限を強化した。同制度の廃止により、これら伝統的慣習首長は植民地政庁行政網に組み込まれていった。*Ibid.*, p. 23.

(注5) この時期を通してのプリアンガン地方の首長の地位については、インドネシア人史家の立場から次の好論文がある。Soekanto, Soerjono, "Parahijangan dan Pamongpradja Sampai 1871," (「1871年までのバラヒヤンガンとパモンブラジャ(土着官僚層)」), *Penelitian Sedjarah*, no. 8 (Djuli, 1964). また併せて田中則雄「西部ジャワ慣習レヘントについて」(山本達郎編『東南アジアの権力構造の史的考察』竹内書店1969年)317-328ページ。

(注6) Alisjahbana, *op. cit.*, pp. 46-47.

(注7) J. S. Furnivall (南太平洋研究会訳)『蘭印経済史』(実業之日本社 昭和17年)266-275ページ参照。

(注8) Matsuo, H., *The Javanese Traditional Cotton Industry of the 17 th. and 18 th. Century*,

Inst. of Developing Economies, 1969, p. 33.

(注9) 同期における社会変動の分析として Wertheim, W. F., *Indonesian Society in Transition*, The Hague, W. Van Hoeve, 1956, pp. 111-113. また次の小論も有益である。Mortimer, R., "Class, Social Cleavage and Indonesian Communism," *Indonesia*, no. 8 (Oct. 1969).

(注10) Dam, H. ten, "Cooperation and Social Structure in the Village of Chibodas," *Indonesian Economics, The Concept of Dualism in Theory and Policy*, The Hague, W. Van Hoeve, 1961, pp. 345-382. またその紹介、解説として、Wertheim, *op. cit.*, pp. 111-113. 増田与「インドネシアの農業問題」(滝川勉編『東南アジアの農業農民問題』亜紀書房 1971年)。

(注11) 増田与『インドネシア現代史』(中央公論社 1971年) 324-327ページ。

(注12) この階級区分は *Bintang Merah* (赤い星) 誌 (1954年7, 8月号) 中の論文 "Tuntunan untuk Bekerja di Kalangan Kaum Tani" (「農民の中で働くための手引き」) に基づくものであり、その詳説については Masuda, A., *Agrarian Structure and Reform in Indonesia* (ECAFE Tsusin no. 145, January 1958), pp. 1-41. を参照。

(注13) Alisjahbana, *op. cit.*, p. 53.

(注14) 悪地主、高利貸、悪仲間、青田買、官僚資本家、企業家、ごろつきを指す。*Harian Rakjat*, 8 Jan., 1964.

(注15) Aidit, D. N., *Kaum Tani Mengganjang Setan-setan Desa* (『農民は村の悪魔を粉碎する』), Djakarta, Jajasan Pembaruan, 1964, pp. 20-57.

(注16) 1960年農地法の実質的施行を要求するPKI, その大衆団体(特に農民戦線)の運動, *Harian Rakjat*, 13 Jan., 1964.

(注17) アイディットは先の論文の中でこの事を言及している。Aidit, *op. cit.*, pp. 53-56.

II 若干の政治文化的特質

政治的独立を達成したインドネシアがより高次の進歩と自立を目指す過程で、徐々に国民国家としての政治文化——ある政治体系の成員の間に見られる政治に対する個々の態度と志向性のパター

ン、という意味における^(注1)——を形成しつつあることはいうまでもない。その一方、サブ・ナショナルな地方レベルで、各地方社会は自らの文化的伝統を保持しつつ、またそれと国民的アイデンティティとの調和を求めつつ独自の政治文化をもっているということもまた事実である。

政治文化はさまざまな要因が絡み合って形成されてきた歴史的所産であり、特定の要因を強調するのは必ずしも容易ではないが、ここでは西部ジャワの政治文化を——特にジャワ他地域との比較、対比において——みていく際、もっとも基本的と思われる2要件、すなわち人(スダ族)とかれらの信条体系の基礎としてのイスラムについて若干の考察をしておきたい。

1. イスラム

インドネシアにおけるイスラムの浸透は極めて顕著な地域的差異を示し、また在来的文化諸伝統との混交の仕方も一様ではない。西部ジャワにおけるイスラムは——スマトラ沿岸地域、南スラウェシ、あるいはジャワ北部沿海地方と同じく、だが中、東部ジャワの内陸部と異なり——政治的、社会的、文化的同質性を与える上で大きな貢献をしてきた。西部ジャワにおけるイスラムの強さはハジ(hadji, メッカ巡礼帰り)の数によっても端的に示される。たとえば戦前1926~1935年の期間において、西部ジャワからの巡礼者は年平均6050人で、これは人口10万人当たり52人に相当するものであった。他方、同期間内における他のジャワ地方での数字は各々3719人、14人にすぎなかった^(注2)。伝統的にこれら巡礼者はメナ(menak)の名で呼ばれるスダ族貴族階級(ジャワ族のプリアイに相当)ならびに富裕な農民、中小商人層から成り、かれらは巡礼のために富を費すことを名誉ある行為と考えていた。社会の世俗化が進行し、あるいは交通機

関の発達によって巡礼が比較的容易になった今日では、ハジに冠せられる名誉と威信は相対的に低下したものとはいえ、西部ジャワ全般特に農村社会で持つ巡礼の社会的影響力は未だに根強いものがある(注3)。

また第2表にみるように、初等教育におけるイスラム学校——中等教育では異なるが——は、他地域より広範に普及していることも社会の基底レベルにおけるイスラムの強さを示すものであろう(注4)。こうした初期段階の教育におけるイスラムの顕著な影響は、社会化過程とりわけ人々の政治的志向性を決定するに当り一定の役割を演じるものと考えられる。

第2表 イスラム教育の実態：1954年

	初 等 学 校		下 級 中 等 学 校		上 級 中 等 学 校	
	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数
西部ジャワ	5,059	872,107	57	6,986		
ジャカルタ	128	30,387	5	630		
中部ジャワ	1,947	313,206	109	15,962		
ジョグジャカルタ	157	20,361	36	5,067	1	103
東部ジャワ	1,807	296,845	73	8,933		
全インドネシア	13,057	1,929,777	776	87,932	16	1,881

(出所) M. Junus, *Sedjarah Pendidikan Islam di Indonesia* (『インドネシアにおけるイスラム教育史』), Djakarta: Pustaka Mahmudiah, 1960, p. 339.

2. スンダ族

西部ジャワ住民の約4分の3はスンダ族であるが、ここではインドネシアにおけるスク・パンサ(Sukubangsa=種族)の問題に若干触れておきたい。スク・パンサは「言語とアダット(慣習法)を基軸にした独自の文化により性格づけられる indigenous group」と、通常、定義づけられている(注5)。異なるスク・パンサ間の協調と全体的調和は、インドネシア建国の理念でもあり、こうした悲願はピンネカ・トゥンガル・イカ(Bhinneka Tunggal Ika, 多様性の中の統一)というナショナル・スローガン

の中に端的に表現されている。しかしながら、種族の分布に関する公式統計は、1930年の蘭印政庁によるセンサスをもって最後としている。この事実自体、種族に関する統計は政治的にも社会的にも望ましいものではなく、また1945年独立宣言の精神に鑑み正当化でき得るものではないとの、独立後の共和国指導者の一貫した信念を反映するものであろう。したがって特定の種族出身であることがいかなる政治的意味を持つかを論じることが、インドネシア国内においては極めて稀なことであった(注6)。

スク問題が孕む国民的統一への潜在的危険性は、1950年代末の諸地方での反中央政府運動後、中央集権化を目指す指導制民主主義時代にはいると一層鋭く認識されるようになった。当時スカルノ大統領に近い立場にあったムルバ党所属の文部大臣プリヨノ(Prijono)の次の発言——われわれの間にあるスク意識が強く、またそれが堅固な道徳的基礎を形成している限り、インドネシア国民としての意識は相対的に低いものとどまらう。それゆえに、われわれはスク意識を放棄し国民意識を高めなければならない(注7)——は、その期における中央指導者の意識を象徴的に語っている。

スク意識と国民意識の相互関係についてはスマトラ出身の知識人モハマッド・ナワウィ(Mohammad Nawawi)が指摘するように経済発展や社会的コミュニケーションが発達すればスク意識は国民的統合に何ら障害とはならないという見解が、インドネシア国内では大勢であることは容易に理解しうる(注8)。だが一方では、近代化の過程が種族間の差異意識を助長し、それが政治化されることによって国民的意識の形成を遅延させるかもしれないとする警戒論も欧米の学者によって指摘されている(注9)。

こうした、いわゆる“忠誠心”あるいは“アイデンティティ”の観点からスダ族をみるならばかれらの“スダ人”としての意識と“インドネシア人”であるとの意識の間には何ら基本的な葛藤はないように見受けられる(注10)。また、スダ族は自らの文化伝統に強い自覚と深い自信をもっているが、その独自性は、インドネシアの文化的多様性を構成する重要な一部であると考えている。ただ時として、(次章でみるごとく)スダ族社会の中で、反中央政府意識がたかまるが、これは決して反“インドネシア”を意味するものではなく、かれらがライバル種族とみなすジャワ族が中央で優位に立っていることへの反発であると一般には理解されている(注11)。

(注1) Almond, G. & G. Powell, *Comparative Politics; A Developmental Approach*, Little, Brown & Comp., 1966 第3章を参照。

西部ジャワの政治文化を理解する上で有益と思われる作業が、フィース、ギアツによってなされている。フィースはインドネシアの政治文化分析にあたり、“回教—商業的”政治文化と“ジャワ—貴族的”政治文化という二つの概念を使用した。西部ジャワについては明示的な言及をしていないが、より(1)に近いものとしてとらえている。Feith, H., *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*, Cornell Univ., 1962, pp. 30-31. ギアツは生態学的概念を用いインドネシアを“Swidden”と“Sawah”の2 eco-systemに分け、西部ジャワを両者が混在する地域とみなしている。Geertz, C., *Agricultural Involution*, Univ. of California, 1968, pp. 12-36. こうした西部ジャワの特異性は同地方の政治をナショナル・レベルで理解するための一つの重要な要因と考えられる。

(注2) Vredenburg, J., “The Haddj,” *Bijdragen Tot De Taal, Land en Volkenkunde*, Deel 118 le Aflevering, 1962, p. 52.

(注3) Alisjahbana, *op. cit.*, p. 68.

(注4) 中等学校は中部ジャワにより多くみられるが、これは同地方、特にジョグジャカルタ地方に強いムハマディア (Muhammadiyah) の影響であろう。ムハマディアは1912年にジョグジャカルタで誕生し、キ

リスト教ミッションとの競合の中で、近代イスラムを普及することを目指していた。この運動の中で、高等教育機関の創設は、重要な活動の一つであった。他方、伝統的なイスラム教育の場たるプサントレン (Pesantren) は西部ジャワ、東部ジャワに多い。Junus, M., *Sedjarah Pendidikan Islam di Indonesia* (『インドネシアにおけるイスラム教育史』), Pustaka Mahmudiah, 1960, pp. 189-279.

(注5) Skinner, G. W., “The Nature of Loyalties in Rural Indonesia,” in *Local, Ethnic and National Loyalties in Village Indonesia: A Symposium*, ed., G. Skinner, Yale S. E. Asia Studies, 1959, p. 5.

(注6) Feith, H., and L. Castles (ed.), *Indonesian Political Thinking*, Cornell Univ. Press, 1970, Chapter 10. また、種族に関する社会学的研究としては、Jaspan, M. A., *Ethnic and Racial Relations in Indonesia*, Bandung, Padjadjaran Univ., 1959 ならびに *Social Stratification and Social Mobility in Indonesia*, Djakarta, Gunung Agung, 1961.

(注7) Feith, H., and L. Castles, *op. cit.*, pp. 327-330.

(注8) Nawawi, M., *Regionalism and Regional Conflicts in Indonesia*, Princeton Univ. Ph. D Diss., 1968, p. 353.

(注9) Skinner, W., *op. cit.*, p. 11.

(注10) 筆者が1971年7月～1972年3月、ジャカルタ滞在中、たびたび、意見をきく機会をもったスダ文化運動の長老である Didi Kartasmita, Atoeng Wangsamihardja 氏らからの示唆によるところが大きい。

(注11) *Ibid.*

III 中央の政治過程と西部ジャワ政治

1. 第1回総選挙と西部ジャワ

(1) 西部ジャワにおける4大政党

西部ジャワ政治の基本的特質をジャワ他地域と比較しつつ理解するために1955年9月に行なわれた第1回総選挙結果のデータを利用してみたい。

1955年第1回総選挙(1971年7月に第2回総選挙実施)におけるもつとも顕著な特質は、特定主要政党とその支持基盤の地域性との密接な関係であ

ることは衆知の事実である。純然たる種族、地方政党は別としても、4大政党はそれぞれ独自の強力な基盤をもっている。第3表にみられるようにインドネシア国民党(PNI)はその全得票の81.4%を、守旧派イスラムを代表するとされるナフダトゥール・ウラマ党(NU)は85.4%、PKIは88.7%を、ジャワ島から得ている。他方、イスラム近代派を代表するとされるマシユミはジャワ島からは51.2%を得たにすぎず(中、東部ジャワからはわずか25.4%)、48.8%をスマトラを中心とする外島に依存した^(注1)。この4大政党は全投票数の4分の3以上の支持を得たにも拘らず、インドネシア国民社会のもつ地方的多様性、アリラン^(注2)の要因により、どの政党も単独で政権を維持するに十分な支持を得ることができなかった。

第3、4表が示すように、西部ジャワにおける4大政党の得票状況はジャワ他地域と対照的な型を示している。4大政党が西部ジャワにおいて、全体の70%弱の支持率しか獲得できなかったのに

第3表 1955年総選挙：ジャワにおける4大政党の得票分布(%)

	PNI	マシユミ	NU	PKI	その他	計
西部ジャワ	22.1	26.4	9.6	10.8	31.1	100
中部ジャワ*	23.5	10.0	19.6	25.8	21.1	100
東部ジャワ	22.8	11.2	34.1	23.2	8.7	100
ジャカルタ特別市	19.6	26.0	15.7	12.0	26.7	100
インドネシア全体	22.3	20.9	18.4	16.4	22.0	100

(出所) *Daftar Hasil Pemilihan Umum DPR* (『国会総選挙結果統計』)、(インドネシア情報省：1956)より算出。

(注) ジョグジャカルタ特別地域をふくむ。

第4表 1955年総選挙：4大政党の州別依存率(%)

	西部ジャワ	中部ジャワ	東部ジャワ	ジャカルタ特別市	その他	計
PNI	18.2	35.1	26.3	1.8	18.6	100
マシユミ	23.3	11.4	14.0	2.5	48.8	100
NU	9.7	25.5	48.5	1.7	14.6	100
PKI	12.2	37.7	37.2	1.6	11.3	100

(出所) 第3表に同じ。

対し、中、東部ジャワでは、それぞれ88.9%、91.3%の高支持率を得た。4大政党のうちPKI(中、東部ジャワ基盤)とNU(東部ジャワ基盤)が、西部ジャワではきわめて弱い一方、中、東部ジャワでは10%余の支持しか得なかったマシユミが約26%を得、第1党の座を占め、そうした意味では外島、特にスマトラに類似した型を示したことは興味深い。また、西部ジャワの4大政党支持率が低いということは、多数の中小政党——純粋な地方、種族志向の政治集団も含めて——が同地方を基盤としていることを説明するものである(注14参照)。

このような西部ジャワの全体的特質をふまえ、次に同地方をより下のレベルで検討していきたい。そのための道具としてダエラ(Daerah)という一種の地理的/文化的概念を使用する。このダエラ概念はインドネシアにおいても確固たる定義に基づいて使われているわけではないが^(注3)、その中心的意味は、種族的、言語的、文化的同質性によって規定され、歴史的共通体験に影響された一定地域内の人々が、明示的にせよ暗示的にせよ、帰属感をわかちあう対象としての実体、というふうに理解できよう。

オランダ植民地支配者は、その版図内の政治文化的多様性を精力的に調査し、それはファン・ホーレン・ホーフエン(van Vollenhoven)やテル・ハール(Ter Haar)に代表される慣習法学者による慣習法/下位文化圏の研究へと発展していった。たとえばテル・ハールは蘭印全体を19の下位文化圏に範疇化し分析したが、もっとも複雑かつ興味深いジャワについて、わずか3文化圏に分類するにとどまった^(注4)。したがって本論で西部ジャワというエンティティのダイナミズムをみる上で必要な、より下位レベルでの多様性をみるには、テ

ル・ハールの慣習法圏概念は十分に有効なものとはいえない。

ここでは西部ジャワの多様性を論じるに際し、まず、その地理的単位として、植民地時代にオランダ政庁とインドネシア社会の基底部を行政的に仲介する機能を演じた理事州^(注5)を使用することにした。西部ジャワは次の5理事州からなっていた。1. バンタム理事州 (Bantam, 現 Banten 地方, 7900 km²), 2. バタビア理事州 (Batavia, 現 Djakarta 地方, 8100 km²), 3. バイテンゾルク理事州 (Buitenzorg, 現 Bogor 地方, 1万1600km²), 4. プリアンゲル理事州 (Prianger, 現 Priangan 地方, 1万3600km²), 5. チェリボン理事州 (Cheribon, 現 Tjirebon 地方, 5600 km²)

仮に各理事州が総選挙における得票形態において、それぞれ特徴ある姿を示しているならば、われわれは、これら理事州を、前述した意味におけるダエラ概念によって把えることも可能であろう。そして結論的にいうならば、次に述べるように(第5表参照),各理事州がより大きな体系(西部ジャワ全体)の下位体系として自らのエンティティをもつダエラと見做すことが十分可能であり、それは西部ジャワ内部の多様性を理解する上で有効でもあろう。

第5表 1955年総選挙：西部ジャワ旧理事州での投票分布(%)

	投票人口比	PNI	マシユミ	NU	PKI	4大政党	その他	計
バンテン	8.98	16.63	5.81	3.4	1.46	7.23	2.8	100
ジャカルタ	19.50	21.12	4.8	8.0	10.16	3.63	6.4	100
ボゴール	18.55	24.43	2.2	8.3	6.47	1.32	8.7	100
プリアンガン	33.46	20.52	4.8	8.5	14.26	8.03	2.0	100
チレボン	19.48	24.32	1.9	12.3	11.67	0.12	9.9	100
計	100							

(出所) *Daftar Hasil Pemilihan Umum DPR* (『国会総選挙結果統計』), (インドネシア情報省: 1956年)より算出。

第6表 1955年総選挙：西部ジャワ各理事州のサントリ, アバンガン比(%)

	サントリ * (マシユミ, NU, PSII)	アバンガン (PNI, PKI, IPKI)
バンテン	71.3	20.7
ジャカルタ	37.6	41.6
ボゴール	47.2	39.0
プリアンガン	36.7	40.0
チレボン	35.6	39.5

(出所) 第5表に同じ。

(注) * Perti 党は西部ジャワでは、ほとんど勢力をもたないので(最強のボゴールでも0.008%の支持率)算出されていない。

(イ) バンテン地方では、サントリ(イスラム篤信)諸集団が70%強の票を獲得し、とりわけマシユミは全体の3分の1以上の支持率を得た。こうした濃厚なイスラム的政治社会の中では PKI の組織化は極めて弱く1.5% 弱の支持を得たに過ぎなかった^(注6)。この事実は、バンテン地方が、西部ジャワにおいて、もっともイスラムの諸要因が社会生活を律しているということの反映であろう。バンテン地方からのメッカ巡礼者の比率が伝統的に極めて高いという事実も、そのことを部分的に例証するものである。バンテンからの人口10万人当り巡礼者の数は他の西部ジャワ全域の約2.5倍を示している。すでにみたように、西部ジャワからの巡礼者数は、中、東部ジャワの合計を凌駕しており、バンテン地方はジャワ全体の中で、もっともイスラムの強い地方の一つといえよう。

(ロ) プリアンガン地方における4大政党の代表率、投票分布の形態は、西部ジャワ全体のそれにもっとも近い数値を示しており、同地方が西部ジャワの代表的地方であることをうらがきしている。

(ハ) チレボン地方(中部ジャワとの北部境界)は、マシユミが第1党を占め得なかった唯一のダエラであった。マシユミは全ダエラで、ライバル回教政党 NU に対し優位に立ったが、チレボンでは相

対的にNUがマシュミに善戦している。

(二) 首都ジャカルタ周辺において、4大政党は60%をわずかに上回る支持を得たにすぎなかった(ジャカルタ市だけをみると約75%)。このことは急進民族派のムルバ党、あるいはIPKI(インドネシア独立擁護連盟)といった中小規模の全国政党、あるいは種族、地方志向の政治集団がこのダエラに有力な地盤を持っていることを示すものである。また、既成大政党のアリランに属さない比較的政治意識の高い層がこの地方に多く存在することも一因として指摘できよう。

(三) ボゴール地方では、4大政党の代表率ももっとも高い。またサントリ勢力の強いこと、アバンガン(イスラムの規制力が比較的稀薄な農民グループ)を代表する諸政党の弱いという点でパンテン地方に次いでいる。

次に西部ジャワ内部における都市部(バンドゥン、ボゴール、チレボンの3都市)と県部(19のカブパテン)に分けて西部ジャワの投票分布をみると次のような特徴を見てとることが出来る。

第7表 1955年総選挙：西部ジャワ都市、県部の比較 (%)

	投票人口比	PNI	マシュミ	NU	PKI
都市部	5.9	22.3	16.0	8.0	20.7
県部	94.1	22.0	27.1	9.8	10.3

(出所) 第5表に同じ。

(イ) サントリ諸政党は県部を、アバンガン諸政党は都市部を重要基盤としていることが対照的に示されている。これを一般化するというならば都市部においては、農村地帯と異なり、宗教により規定される伝統的諸力による統合力が弱まっていることを端的に示すものであろうか。

(ロ) PNI, NU は都市、県部に平均した支持層

を持っていることを示している。他方、マシュミ、PKIに関しては、前者が農村社会に強く依存している一方、PKIはバンドゥン、チレボンといった外部からの変動要因の波をかぶりやすい、都市化が進行した地域に基盤を見出し出している。また、この両党の支持基盤の対照性は、両党の対立が単に中央レベルにおいてのみならず、特定地方内部においても埋めがたいものであることを物語っているともいえよう。

(ハ) 都市部、県部共に、マシュミはNUに対し優勢を示し、マシュミが西部ジャワにおけるイスラム・コミュニティを指導していることを物語っている。

(2) 西部ジャワにおける中小全国政党

西部ジャワにおいて、4大政党の支持率が70%弱にとどまったということは、同地方においてIPKI, ムルバ党, インドネシア・イスラム連盟党(PSSI), あるいはPSIといった中小政党が比較的高い支持率をかちえたということを示すものである。より具体的に各ダエラにおける中小全国政党の得票状況を概観しておこう。便宜上の定義として“全国政党”の用語を、全国で1%以上の得票率を得、しかもその支持が特定一地方に限定されていないものとして用いる。4大政党, PSSI, パルキンド(キリスト教徒党), カトリック党, PSI, IPKI ならびに小回教政党 Perti の計10党が含まれよう。(しかしながら、西部ジャワではキリスト教2政党とPertiの影響力が極めて弱いので、それらをおとし、代わりにこの地で影響力をもち、また独立後政治史で特異な役割を演じたムルバ党をふくめることにする。)

4大政党が西部ジャワの五つのダエラでそれぞれ興味ある得票分布を示したのと同じように中小政党もまた特定ダエラとの間に密接な関係をもつ

第 8 表 西部ジャワにおける中小全国政党の得票状況

(単位: 1000)

	PSII	パ ル キ ン ド	カ ト リ ク 党	PSI	IPKI	Perti	ム ル バ 党
(a) 全得票数	1,091	1,003	771	735	540	483	200
(b) 内西部ジャワ	394	14	6	220	441	4	121
(b) (a) (%)	36.0	1.4	0.8	30.0	81.8	0.8	60.8
バンテン	137.8(35.0)			2.0 (0.9)	17.3 (3.9)		0.9 (7.0)
ジャカルタ	70.5(17.9)			14.3 (6.5)	141.9 (32.2)		52.1 (42.9)
ボゴール	87.2(22.2)			12.5 (5.7)	106.1 (24.1)		14.2 (11.7)
プリアンガン	80.2(20.4)			91.1 (41.4)	126.7 (28.7)		5.4 (4.4)
チレボン	17.5(4.4)			100.1 (45.5)	49.2 (11.1)		48.8 (40.2)
計	394 (100%)			220 (100%)	441 (100%)		121 (100%)

(出所) 第5表と同じ。

ている。多くの場合、それは政党創生期における支持基盤と関連している。たとえば:

(イ) 1947年4月、マシュミから分離したイスラム政党 PSII は、バンテンを最大基盤とし、またボゴール、プリアンガンをも支持拠点としている。これら諸地方は、同党の前身諸組織が、戦前、もっとも活発だったところでもある。またマシュミ、NUの2大イスラム政党と同じくPSIIもバンテン地方を最大の基盤としており、同地方のサントリ色を強めている。

(ロ) PSIは、1948年2月、西欧的社会民主主義を志向していたS・シャフリール (S.Sjahrir) らの指導下に結成され、チレボン、プリアンガン地方を主要活動基盤とした。PSI幹部の多くは、日本軍政期あるいは独立闘争初期にシャフリールと行をともにしたものが多いが、その中核指導者の中には、1930年代初期にハッタ(Hatta)、シャフリールが指導したインドネシア国民教育協会(Pendidikan Nasional Indonesia)の旧同志もいる。同党は、大衆の基盤をもたないため、総選挙では惨敗したが指導的官僚層、国軍中枢等に無視しえぬ影響力をもっていた。

(ハ) IPKIは、当初、西部ジャワ、シリワンギ管区の復員軍人の政治団体として結成され、総選

挙におけるその支持も、5分の4以上は、西部ジャワから得た。中でも、日本軍政以降、数多くの軍事的、準軍事的諸組織の活動拠点であったジャカルタ、プリアンガン地方で強い支持を得た。

(ニ) 「急進的民族政党」と一般に呼ばれるムルバ党は、1948年10月に誕生した。特異な革命家として知られるタン・マラカ (Tan Malaka) の影響をうけた同党指導者たちは、45年独立宣言にいたる過程で極めて重要な役割を演じたが^(注7)、その活動拠点は、ジャカルタ、チレボンが中心であった。

(ホ) 1960年代初期、スカルノ体制に反対した民主連盟 (Liga Demokrasi) を形成した8政党の内4政党 (マシュミ、PSI、PSSI、IPKI) は、上でみたように西部ジャワを強力な支持基盤としていた。したがって指導制民主主義体制が固まり、マシュミ、PSIといった少なからぬ影響力をもつ政党が非合法化されたことは、その後の全国政治における西部ジャワの地位に何らかの影響を及ぼしたと考えられるが、本稿ではそのことを指摘するにとどめたい。

2. 西部ジャワの地方政党——パルキの事例——

西部ジャワにおける“スンダ意識”と“ナショナル意識”の係わり合いをみていく際の一つの素材

としてここでは同地方の代表的な地方政党である
パルキ (Partai Kebangsaan Indonesia, インドネシア
民族党)の党史をふり返ってみたい。パルキは1914
年にパグユバン・パスンダン (Pagoejoeban Pasoen-
dan)としてバタビアで誕生した^(註8)。この年は、民
族主義運動の重要なさきがけとなった、イスラム
同盟(Sarekat Islam)が誕生した2年後であり、パグ
ユバン・パスンダンは、植民地支配下での芽生え
ゆく民族意識、その中でのスンダ族としてのアイ
デンティティ確立への自覚に促されて成立したも
のと理解できよう。運動の中核となったのは、オ
ト・イスカンダル・ディ・ナタ (Oto Iskandar Di
Nata) に代表されるスンダ族下級貴族の子弟たる
若い知識階級であり、かれらは、すでに1908年に創
立されたジャワ族の開明的知識人を中心とする教
育団体ブディ・ウトモ (Boedi Oetomo) ^(註9) に対
して明らかな競合意識を持っていた。ブディ・
ウトモは、ジャワ島の全種族——ジャワ族、スン
ダ族、マドゥラ族——に門戸を開いていたが、西
部ジャワのスンダ族の心を十分引きつけるには至
らず、後にバンドゥンで二つの支部——一つはジャ
ワ族の、他の一つはスンダ族のための——を設
けることを余儀なくされた。

こうした背景下に生まれたパグユバン・パスン
ダンについて、スンダ族出身のS・スマルディ (S.
Soemardi) は、次のように述べている。「成立当
初からパグユバン・パスンダンは、対蘭協調派の
民族主義団体であり、蘭印政庁の祝福を受けてい
た。1931年にいたり、指導部が『地方的民族主義』
は真の『民族主義統一戦線』の生長を妨げるもの
ではないと宣言した時、同党は民族主義の方向に
一步を進めた。」^(註10)

当初、パグユバン・パスンダンは、その活動を
社会面、文化面に限定したが、1919年になり、政

党へと衣替えし、それ以降、1942年初、日本軍政
の開始まで、プリアンガン地方の活動的な民族主
義団体の一つであった。戦前の活動について、党
は、次のような基本的立場を明らかにしている。

(イ) パグユバン・パスンダンは、各種族がおの
おのの種族的、文化的特質を維持するための諸権
利を認める。

(ロ) 全インドネシア国民の共通の運命を考慮
し、パグユバン・パスンダンは全国民共通の政治
闘争を推進する^(註11)。

各種族の明確なアイデンティティ確立を第一義
的に志向しつつも、インドネシアが最終的には独
立という政治的目標を達成するため、全体的な団
結が必要であるとする、こうした認識は、戦前の
西部ジャワのスンダ族諸団体の代表的見解を反映
したものである。

しかしながら、戦前の民族主義運動の流れの中
において、パグユバン・パスンダンは主導的な役割
を果たすには至らないで、時としてその内面的な
種族志向性を批判された。こうした同党批判につ
いて、J・スメイル (J. Smail) は、1920年代末の
PNI、1930年代末のパリンドラ (Parindra、大イン
ドネシア党) バンドゥン支部によってなされた攻
撃をその主なものとして指摘している^(註12)。

3年余の日本軍政による空白期間後、同党は、
1946年インドネシア共和国パグユバン・パスンダ
ンの名称で活動を再開し、オランダによる独立承
認が決定的となった1949年、より非パロキアル、
統一志向的な党名パルキと改名した。かくて新生
共和国における自らの理念をその名称中に明らか
にしたパルキは、その党綱領を次のように規定し
た。

1) パルキは独立し、主権をもった公正にして
民主的な国家における国民の福祉と繁栄のために

闘う……。パルキは、インドネシアの国家と社会が、相互責任の観念に基づいて完成されることを尊重する。この過程で、各地方はその力と個性に応じ各々発展する可能性を持っている。

2) パルキは多種多様な種族、階層から成るインドネシア国民の一体性の存在を認める。パルキはただ一つのインドネシア国民しか存在しないことを認めるが、多種多様な種族、階層があることを否認するものではない。この点に関していえば、パルキは国家的標語たる「多様性の中の統一」(Bhinneka Tunggal Ika) を高く尊重する^(注13)。

かくて、パルキは、国民的一体性と種族的アイデンティティが決して相反する価値ではないことを表明し1955年総選挙に臨んだ。パルキは予想通り、全得票の90%近くを西部ジャワに依存したものの、得票総数は1万6215にとどまった。パルキと同じように、“スダ第一主義”を標榜する他の小政治集団は、各地で割拠状態を呈していたことも手伝い、総体として大きな発言力を持つに至らず、またどれ一つとして国会に議席を獲得することができなかった^(注14)。

パルキのような地方的、種族的な基盤に立脚する小政党は総選挙において、西部ジャワでもっとも数多く輩出したが、それはどのように理解されるのであろうか。

すでに触れたように西部ジャワにおいては、イスラムの影響が相対的に強く、それは政治的にはスマルディが指摘したごとく、非イスラム政党といえども大衆の支持を得るためには——特に農村社会において——キアイ(イスラム教師)と敵対しないことが必要条件であるということを意味している^(注15)。また、このことは西部ジャワにおいてサントリと非サントリ(アバンガン)の間の社会、文化的亀裂が比較的弱いということを示すもので

あり、むしろアバンガン内部にサントリと異和感を持たない層が広範に存在する可能性を示すものであろう。D・レブ(D. Lev)が、1957年地方選挙の分析に際し、中東部ジャワのPNI指導者たちが政治勢力としてのサントリを脅威と感じたのに対し、西部ジャワPNI指導者たちは、ある場合には、宗教的親近性からマシュミと提携し、PKIに対抗したと指摘したのは^(注16)、上の状況を端的に示すものであろう。

このように、アリラン的契機が比較的弱いということは特定のアリランにつながる大政党が社会の基底レベルで活発かつ効率的な組織活動を行なう力を弱めるものであるといえよう。そのことは、他の伝統的——地方名望家(ババ Bapak)^(注17)の威信といった——諸要因が、政党選択に際し、無視しえない役割を演じることを意味する。こうした名望家たちは、選挙において、かれらに対し支持を与えるよう、かれらの地縁あるいは血縁関係者を容易に説得できよう。しかしながら、こうした伝統的基盤に立つ以上、かれらはその影響力を地元周辺を越えて及ぼすことは容易に出来ず、小規模政治集団——特に総選挙に際しての——にとどまざるを得なかった。

3. 総選挙後の中央政治の変動

総選挙は混迷した政治状況を打破し、国民統合を達成するための万能薬として期待されたが、結果的には、主要政党の支持基盤の差異を顕在化させ、従来からの政党乱立状態をより明確なものにした。こうした継続的不安要因は議会民主主義の制度そのものに波紋を投じる契機となった。

総選挙後の政治発展を規定した重要な要因の一つはサントリ政治集団と非サントリ政治集団、特にPKIとの間にみられた対立であった。PKIの伸張に対しては、反共を旗印とするマシュミ、NU

といったイスラム勢力だけでなく、国軍主流派、PNI、さらにはPSI等の競合諸政治集団から不安と警戒が表明された。これら諸政党は、支持基盤を異にし、また、その目指す政治的目標において必ずしも一致点を見い出していたわけではなかったが、PKIの挑戦を脅威と感じ、1956年末にスカルノ大統領が提議したPKIをふくむ連合内閣案にはこぞって反対した。結局、PKIは総選挙での16%強の支持率にもかかわらず選挙直後の内閣では、中央政府内部に足がかりを捉むことはできなかった。

しかしながら、こうした状況は、秀でたリーダーシップを備えた政党を発達させる基盤とはならなかった。また、かといって安定せる連立政権が組織されるには、政党間の共通項が小さすぎた。いわば政治の手詰り状態が出現し、超議会主義勢力——特にスカルノ大統領自身と国軍中央部——の間には政党政治の現状と将来に対する失望の色が濃くなった。慢性的政治不安をおそれ、強力な政治指導の必要を力説していたスカルノは、かくて1957年2月に指導制民主主義の理念を提起し、また国軍も自らが“インドネシア革命”の遂行に果たしてきた伝統的な政治参加を主張するようになってきていた(注18)。

単一共和国制の維持、発展を最大の政治理念とする超議会主義勢力は、総選挙の前後に明白になったアラン間の緊張、あるいは特定政定と特定地域の密接な関係、それらが絡み合ってきた反中央政府感情等を、国民統合にとって危険な兆候と見做し、1957年にはいと徐々に権力中枢への接近をはかった。1957年3月、超議会主義勢力の圧力に抗しきれず第2次アリ内閣が辞職した直後、全国に戒厳令が發布され、政党勢力の地位と機能は一層名目的なものへとおちこんだ。

アリ内閣崩壊後スカルノはジュアンダ(Djuanda)を首相に任命した。前年、スンダ第一主義を唱える運動が発生した西部ジャワ(第5節参照)、スンダ族の出身であり、またどの政党にも所属していなかったジュアンダの任命は、高揚しつつあった外島の反ジャワ運動に共鳴する動きも一部にあったスンダ族の感情を融和し、中央への支持を取りつけるという政治的配慮をもつものでもあった。事実、各主要政党の西部ジャワ支部のジュアンダ内閣に対する一般的な態度は、前アリ内閣へのそれと比べると、はるかに好意的なものへと転化した(注19)。ジュアンダ内閣にはまた、前西部ジャワ知事、PNIのサヌシ・ハルジャディナタ(Sanus Hardjadinata)が内務大臣として任命された(注20)。中央と地方の関係を調整するこの主要ポストへ、サヌシが任命されたことは、もちろん西部ジャワで歓迎され、地方的利益が中央でより関心をもたれる契機となることが期待された(注21)。

同時期におけるもう一つの主要な出来事として、国民会議(Dewan Nasional)が1957年7月に設置された。職能団体——労働者、農民、青年、婦人等——ならびに地方、復員軍人代表等42名から成る国民会議は、スカルノにより“社会を反映”する組織と形容され(内閣は“議会の反映”であるのに対し)、1960年に最高諮問会議にとって代わられるまで地方危機問題を含む国政の重要事項を討議する場として、またスカルノのブレイン・トラストとしての機能を果たした。地方代表の構成はスマトラ3名、ジャワ、カリマンタン、ヌサテンガラ、西イリアン各2名、スラウェシ1名であり、この数字自体は人口比に基づくものではなく、国内の緊張緩和、特に外島への配慮によるものであった(注22)。ちなみに2名のジャワ島代表はイワ・クスマ・スマントリ(Iwa Kusuma Sumantri)ならびにカ

チャスンカナ (Katjasungkana) で、いずれもスダ族出身の指導者であった。特に1920年代からの政治指導者であり、民族運動の長老の1人として西部ジャワにおいてのみならず、全国的にもその影響力が大きいイワ・クスマ・スマントリの任命は——かれ自身、必ずしもスダ族的なるものの完全なる体现者ではないにしても——中央政府に対する西部ジャワの信を保持するのに役立ったと思われる。

4. 中央の政治指導層におけるスダ族の地位
政治的安定が維持される条件の一つは、中央政府が多種多様な諸利益の代表者と必要に応じて妥協し、譲歩し、また時として受容しがたい圧力、要求を拒否することである。インドネシアにおける中央と地方の関係もまさにそうした一例である。特定の地方（種族社会）が中央の政治過程においていかなる影響力を行使しているかを検討す

ることは、その地方と中央政府の関係を論じる際の一つの有効な指標であると思われるので、本節ではスダ族が中央レベルの政治指導層の中でどのような地位を占めているかをみておきたい。しかしながら、この主題に関する基礎資料や過去の研究^(注23)がきわめて限られているため、われわれが、ここで政治指導層という言葉を用いる時、それを、立法機関議員、内閣閣僚、ならびに軍部高官という形式的、制度的範疇に限定せざるを得なかった^(注24)。

(1) 立法機関議員

インドネシアにおける政党と議会は、1950年代後半以降、その実質的な機能・権限を低下させたとはいうものの、4大政党の議員の種族的背景をみることは、インドネシア政治に対する一つの視角を提供するものであろう^(注25)。第9表は有力政党の地域（種族）的基盤に関し、次のようなく

第9表 立法機関議員の種族構成：%と(数)*

	1. 《DPRS》				2. 《DPR》				
	1930年人口比	PNI	マシュミ	NU**	PKI	PNI	マシュミ	NU	PKI
ジャバ	47.0	38.1(16)	23.8(10)	—	64.7(11)	57.9(33)	22.8(13)	15.6(7)	53.8(21)
スンバ	14.5	11.8(5)	4.8(2)	—	17.7(3)	8.8(5)	12.3(7)	8.9(4)	10.2(4)
ミンナ	5.4	7.2(3)	11.9(5)	14.3(1)	11.8(2)	5.3(3)	24.7(14)	4.4(2)	12.8(5)
不	—	7.2(3)	14.2(6)	71.4(5)	—	14.0(8)	17.4(10)	60.0(27)	—
合	100	100(42)	100(42)	100(7)	100(17)	100(57)	100(57)	100(45)	100(39)

	3. 《Konstituante》				4. 《DPR-GR, MPRS》			
	PNI	マシュミ	NU	PKI	PNI	マシュミ	NU	PKI
ジャバ	46.8(54)	12.5(14)	20.9(19)	46.8(28)	21.1(8)	—	26.0(6)	50.0(8)
スンバ	13.8(16)	9.8(11)	2.2(2)	10.0(6)	18.4(7)	—	—	12.5(2)
ミンナ	3.4(4)	18.8(21)	2.2(2)	6.7(4)	10.5(4)	—	4.4(1)	12.5(2)
不	18.1(21)	25.9(29)	63.7(58)	13.3(8)	18.4(7)	—	60.8(14)	6.2(1)
合	100(116)	100(112)	100(78)	100(60)	100(38)	—	100(23)	100(16)

(出所) A. Yasunaka, "The Basic Data on Indonesian Political Elite," *Indonesia*, No. 10 (Oct. 1970), pp. 120-140.

(注) DPRS (暫定議会 1950-55): DPR (選出議会, 1956-60): Konsti. (制憲議会 1956-59): DPR-GR (ゴトン・ロヨン国会, 1960) MPRS (暫定国民協議会, 1960) ただし、新任議員に限定。

* 算出基礎は 特定種族代表数 / 合計議員数 (不明分含) ** NU議員に不明数が多いのはイスラム名からその出身を知ることが困難だからである。

つかの興味ある特徴を示している。

(イ) 政党に属することにより、政治エリートとしての地位が保証された議会制民主主義期(1950～1959年)における最大のイスラム政党であり、1955年総選挙における第2党たるマシュミはスマトラの2種族(ミナンカバウ族とパタック族)からその指導層の多くを輩出した。他方、これと対照的にPNI, PKI, NUはジャワ島の中部、東部のジャワ族地方を強固な基盤としていた。

(ロ) ジャワ族は、マシュミを除く主要政党すべての指導層に、常時、他種族を上回る高い代表率を示している。したがって1950年代後半に始まったマシュミの政治的影響力の後退、それに引き続く1960年の同党非合法化により、中央における外島(特にスマトラ)の利益代表の機会はより狭められるようになった。また、ジャワ島内では、マシュミを第1党とする西部ジャワにおいて、スカルノ指導下の中央政府に対する距離感が大きくなった。マシュミが政治の表舞台から後退したことは、ジャワ族が主導権をもつ中央政府の伝統的な権限が一層増大したことを意味している。H・フィース(H. Feith)の政治エリート概念を援用したA・ウィルナー(A. Willner)は、この間の状況を「行政官型」あるいは「問題解決志向型」エリートは——その多くはマシュミ、P S I系の指導者であり、外島のダイナミックな商業的要因と結びついている——よりジャワ的、急進的ないわゆる「連帯志向型」あるいは「象徴操作型」エリートに対し、権力と影響力をあげわたした」(注26)と約言している。

(ハ) スンダ族はジャワ族に次ぐ人口をもつ有力な種族であり、スマトラの2有力種族の約3倍の人口を有するにも拘らず、4大政党の指導層におけるその代表率は後者と比較しても明らかな劣勢

を示している。その理由として次のような事実が指摘されよう：(i) PNI, PKI,あるいはNUがジャワ族の間に基盤を求め、マシュミが外島の特定地域と密接に結びついていたのに対し、スンダ族は自らの間から特定の有力な政党を育むことがなかった(第1節参照)。(ii) 戦前の民族主義運動史の中でスカルノ(ジャワ族)、ハッタ(ミナンカバウ族)に匹敵する象徴的な指導者が生まれなかった。オト・イスカンダル・ディ・ナタのような全国的に高名な民族運動指導者ですら、その政治的志向性はスンダ的なものに濃く彩どられ真の意味でのナショナル・リーダーにはなりきれなかった(注27)。

(2) 内閣閣僚

歴代の内閣閣僚の構成は、よりはっきりと中央レベルにおける種族間の影響力の差異を反映している。閣僚の任命がコミューナルな情実、家族主義等といったアスクリプティブな、あるいはパーソナルな要因と関連しがちなことを考慮するならば、このことは、十分な蓋然性をもつといえよう(注28)。

第10表 内閣閣僚の種族構成：%と(数)

	1	2	3	4	5
ジャワ族	44.3(39)	54.3(50)	51(51)	57.9(66)	60.9(14)
スンダ族	8.0(7)	14.1(13)	8(8)	8.8(10)	4.3(1)
ミナンカバウ族	18.2(16)	7.6(7)	7(7)	9.6(11)	8.6(2)
パタック族	—	—	—	—	—
不明	11.4(10)	8.8(8)	—	—	—
合計	100(88)	100(92)	100(100)	100(114)	100(23)

(出所) A. Yasunaka, *op. cit.*, p. 116.

Indonesia, Vol. II (Oct. 1966) & Vol. VI (Oct. 1968).

(注) 1. 1950年9月～1957年4月(6内閣)：政党制議会民主主義期(4大政党の対抗関係が政治を規定)

2. 1957年4月～1964年9月(7内閣)：指導制民主主義期(スカルノ大統領、中央軍部ならびにPKIが有力政治勢力)

3. 1965年10月ドウィコラ(Dwikora)内閣
 4. 1966年7月アンペラ(Ampera)内閣
 5. 1968年6月開発(Pembangunan)内閣

1965年9月30日事件後の内閣の変化と継続を見るため。

第10表から判明するおもな特徴は次の通りである。

(イ) もっとも顕著な事実、閣僚ポストにおけるジャワ族の一貫した優位性であり、現在の開発内閣(1971年8月末現在)においても、ジャワ族は、60%強を占めている。

(ロ) 他方、第2期を除くとスダ族の低代表率は顕著である。第2期においては西部ジャワ出身のジュアンダ(Djuanda)が2内閣を継続して指導し(無論、スカノ大統領の後見下であったが)内務相その他の要職を占めた。これは、すでにみたように1958年スマトラでの反中央政府運動前後の政治危機を反映し、西部ジャワの協力、支援——少なくとも中立的立場——を必要としたスカノ大統領ら中央政府の同地方に対する宥和政策とも関連すると考えられよう。

(ハ) 議会主義制度期においては、おもにマシュミ(またある程度においてPSI)を通し、スマトラ出身の閣僚経験者が多く輩出し、特に第1期では人口比5%に対し閣僚数比は20%近くを占めた。しかしながら地方危機後、指導民主主義期への移行に伴い、スマトラ出身者の政府(内閣)内部での影響力は急激に低下していった。

(3) 軍指導部

第11表にみられるように、国軍(陸軍)指導層に占めるスダ族の比重は必ずしも高くない。しかしながら、ナスチオン(A. H. Nasution, バタック族)やカウイララン(Kawilarang, メナド族)ら軍近代化に重要な役割を演じた指導者が、非スダ族でありながら、西部ジャワで教育を受け、またスダ語を完全に理解するという事実が示すように、スダ族社会と多くの軍指導者との間には密接な関係がある。このことは、反蘭独立闘争開始以降(植民時代にもそうであったが)、西部ジャワとり

わけバンドゥン市が軍事教育・教練の中心地であったことに由来するものである。またオランダ語による西欧的近代教育を享受した若い知識階級を母体としたいわゆる陸軍バンドゥン・グループは、共和国最強の軍組織である西部ジャワのシリワンギ管区の創設、育成にあたり極めて重要な役割を演じた^(注29)。陸軍バンドゥン・グループの中核は、第2次大戦前夜におけるバンドゥンのコスモポリタンの——西欧の影響の強さ、ならびに各種族の交流の中心という意味における——な学生コミュニティを反映し、スダ族上流階級、あるいは外島の名門家族の子弟たちから構成されていた^(注30)。

第11表 陸軍指導層の種族構成*

	対象期間	種族			合計	スダ族比率(%)
		ジャワ族	スンダ族	その他		
中央軍司令部 (方面区司令部)	1962~69	28	3	13	44	6.8
地方軍司令部	1960~69	33	7	6	46	15.2

(出所) *Indonesia*, Vol. 3 (April 1967), pp. 205-216; *op. cit.*, Vol. 4 (Oct. 1967), pp. 227-229; *op. cit.*, Vol. 7 (April 1969), pp. 195-200.

(注) * データは未だ完全なものではない。

5. スダ族アイデンティティの模索

これまで概観してきたような中央レベルでの政治状況、政治指導層の態様等を背景として、1956年にはいると、ジャカルタの中央政府の権力行使と正統性に対する諸地方からの不満が顕在化するようになった^(注31)。これらの地方的、種族的不満は、具体的には、スダ族、スマトラのアチェ族、ミナンカバウ族、バタック族(特に東スマトラのシマルガン・バタック族)等の間で種族アイデンティティを志向する諸集団の誕生となって現われた。

種族的アイデンティティを求める最初の運動は、まず西部ジャワのスダ族の中からおこり、ジャカルタ、バンドゥンあるいはボゴールといった主要都市のみならず県部小都邑にも拡がり、隠

健な、だが根強い社会文化活動を行っていた(注32)。だが、こうしたスダ族長老たちによる運動に物足りなさを感じた一部のより政治に熱心な青年グループは、1956年6月に、スダ青年戦線(Front Pemuda Sunda)を結成し、当初からジャワ族との対抗関係の中でスダ族アイデンティティを明確にし、利益を統合していくことを主眼としていた。全国的に広がった微妙な種族意識についての論争は、スダ青年戦線が同年8月小冊子を配布し、その中で党としてPNI、個人としてスカルノ大統領、ならびに“ジャワ族膨張主義”を攻撃したことからはじまった(注33)。

西部ジャワでは、この問題をめぐり激しい論争が展開されたが、それらを整理してみると大体次のような思潮に要約され得よう。

第1のグループは、スダ青年戦線が提起した問題を基本的に承認し、積極的に評価するグループであった。このグループは、先に述べたパルク党に代表され、同党議長 R・S・スラディレジャ(R. S. Suradiredja)は、「スダ族の現状と将来を憂慮するものは何人といえども青年たちの訴えにひかれるであろう。……ただ不幸にしてかれらの提起の仕方はあまりに乱暴であった。……西部ジャワ各界の主要なポストは、スダ族に代わってジャワ族が占めている兆候があるというのは事実である。」と述べた(注34)。また、国会第2副議長の要職にあった PSII のアルジ・カルタウィナタ(Arudji Kartawinata)も積極的な同意を与えた(注35)。このグループにより醸成された危機的状況は大事に至らなかったものの、独立後、国民的一体性の基礎固めを目指していたスカルノら中央の政治指導層に与えた衝撃は大きく(注36)、また、その後1957～58年、頂点に達した地方主義運動のさきがけともなった。さらに1956年12月の選挙に基づ

いて発足した制憲議会の中での論議とも関連し、単一共和国制か連邦制かという建国基盤そのものに係る論争にもつながっていった。4大政党の中ではマシュミがタカ派の立場をとり、同党の地方指導者ジェルマン・プラウィラウィナタ(Djerman Prawirawinata)は、青年グループに同情的な態度を示しつつ、連邦制度こそが既存の困難を取り除く唯一の方法であり、単一共和国制はスダ族には受け入れ難いものであるとする極めて強硬な論を展開した(注37)。しかしながら、連邦制の要求、あるいはジャワ族が中央政府を支配しているとの西部ジャワマシュミ強硬派の非難は、むしろ同地方の多数意見を代表するものではなく、かえって同党と他の主要政治集団間の緊張関係が、全国レベルでも地方レベルでも高まっていく一因となった。

この問題に対する第2の立場は、西部ジャワ州議会指導者A・アストラウィナタ(A. Astrawinata)とG・ウィラマントリ(G. Wiramantri)が署名した声明に代表されるもので、第1のグループに反対するものである。かれらは青年戦線による小冊子事件は、インドネシア国民を分裂させ、種族間の対立を扇動し、共和国の基礎を脅かす破壊活動であると厳しく糾弾した(注38)。

こうした分極的な見解を調整し、同事件の拡大、深化を未然に防止するのに貢献したのは、次に述べる隠健な第3のグループの影響力と威信であった。このグループは西部ジャワの著名な円熟した知識人により構成されるスダ族諮問協議会(Badan Musjawarah Sunda)で、独立運動の長老でもあるイワ・クスマ・スマントリに指導された。同協議会は政府諸機関、諸政党、団体間の協調とならんで、種族間の緊密な協力関係を希望するとの旨を表明した(注39)。同様の見解は、翌年首相に任命

されたジュアングによっても次のように表明された。「地方文化——初等教育，特別訓練において使用される言語の問題も含めて——は地方的必要に応じて発展されるべきである。しかしながら，国際関係において，インドネシアは，すべての面において，中央政府によって代表される一体性を形成するものであるということ，各地方も中央政府も，ともに銘記すべきである。」^(註40)

以上，西部ジャワにおけるスダ族のアイデンティティの模索——種族意識の発現ならびに，それとナショナル・アイデンティティとの調整過程——を第1回総選挙直後の政治的混迷との関連で理解してみた。より一般化していうならば，この論争は，文化的多様性に富んだ新興独立諸国家がその一体性を堅固なものにし，国民国家としてのアイデンティティを確認する過程でみられる西欧の意味における“市民”意識と在来的なものへの帰属意識の間の葛藤ということもできよう^(註41)。

6. 地方選挙と西部ジャワ政治

総選挙後，議会内においてマシュミを中心とする政治勢力が広範な地方自治権の獲得を主張し^(註42)，それは1957年法律第一号としてある程度現実化された。同年の地方選挙は，もちろんこうした政治動向と関連している。インドネシアの地方議会は単一共和国制に移行後（1950年8月），任命制議会が存在していたが，これは総選挙後，各政党の力関係に応じた議席配分が行なわれ暫定地方議会として機能していた^(註43)。

西部ジャワでの地方選挙は，1957年8月10日，実施された。しかしながら，ナショナル・レベルにおける中央政府と外島間の対立の深刻化，あるいは戒厳令発布にみられる超議会勢力の伸長に対し，各政党は，十分な対策と方針をたてることができなかった。したがって，各政党の選挙活動も

争点が不明確なものとなり，競合政党間の低次元での非難，応酬あるいは具体的方策を伴わない公約合戦に終始した^(註44)。選挙の結果，マシュミは総選挙の時と同様第一党の座を守ったが，前回第二党であった PNI は約50万票の得票減で，60%の支持増を得た PKI にとって代わられた。PKI は主としてバンドゥンやチレボンといった都市部からの票を基礎にし，セララン (Serang) 県，パンデグラン (Pandeglang) 県——両県ともイスラムの強いバンテン地方——を除く県レベルでも党勢拡大に成功した。

1955～57年における西部ジャワでの PKI 躍進を社会構造あるいは政治意識の変化と関連させて分析するには，資料が不十分だが，この期間における中央レベルでの政治的展開を概括的にたどって見るならば，同党の伸張を可能にした次のような要因があったことを指摘できよう。

(1) PNI, マシュミ, NU の3大政党が中央での権力闘争に重点をおき，地方選挙に対する十分な取り組みをおろそかにしていた一方，PKI (および同党系諸大衆団体) だけは，アイディット, ルクマン (Lukman), ニョト (Njoto) に代表される若い有能な指導層の下で，都市，農村部をとわず万遍なく日常活動を行っていた。新指導下での PKI は，終極的なユートピア社会を大衆に提示するよりも，地道な活動を通しより身近な問題に訴えることによって票獲得に成功した^(註45)。

(2) 1957年当初以来，PKI と大統領スカルノの関係が密になっていた。自らの組織を持たぬスカルノは軍部（特に陸軍）との間にバランス・オブ・パワーを保つため，積極的に PKI を利用し，また PKI も軍部からの攻撃から自らを守るため，あるいは大衆の中にあるスカルノの人気を票獲得と結びつけるため，スカルノ支持を得策と考えた。

スカルノは1957年2月、PKIを含めた挙国一致的な政治体制が必要であることを明言し、4月に発足したジュアンダ内閣にはPKI 党员ではないが、著名な左派指導者であるムルバ党のプリヨノ、BTI のサジャルウォノ (Sadjarwono)、全インドネシア人民会議のA・M・ハナフィ (A. M. Hanafi) を閣僚として送り込んだ。一方、アイディットは新内閣発足直後、声明を出し、ジュアンダ内閣は『指導制民主主義』のはじまりとはいえないが、PKIが支持するに十分価する内閣であると好意的な反応を示した^(注46)。

(3) それまで完全野党であった PKI は、経済不安、地方危機等の国政上の困難、あるいは競合政党指導者たちの腐敗を、非難できる立場にあり、戒厳令下で軍当局が与党的立場にあったPNI、マシュミ、NUの有力指導者を拘禁したことも逆にPKI に有利に作用した^(注47)。

(4) 国際関係において、政府がソ連、中国と友好関係にあったことも PKI に有利であった。特に地方選挙直前に西部ジャワを訪問したウォロシーロフ・ソ連最高幹部会議議長が、チパナス町において“プリアンガンは地上の楽園”との一言を演説の中に挿入したことは素朴な共産主義への警戒心を緩和するのに役立つといわれている^(注48)。

こうした状況下で行なわれた西部ジャワ地方選挙の特徴を第12表に基づいて簡単に指摘しておきたい。

(1) PKIは西部ジャワの全ダエラで顕著な伸びを示し、特にチレボン地方では最大の支持を勝ち得た。同党は、チレボン市、チレボン県のほか、バンドゥン市、ボゴール市ならびにプルウォカルタ県、チアミス県でも第一党となった。

(2) PKI の伸びは、PNI 支持層を吸収したことが主因であった。表が示すように、サントリ2

政党への支持は1955年と比べほぼ安定的である一方、PNI がバンドゥンを除く地方で後退している。このことは両党が非サントリ層を共通の支持基盤としており、前回 PNI に投じられた票が相当数 PKI に流れたことを示すものであろう^(注49)。

(3) 地方選挙は、純然たる地方利益を代表するため、地方/種族政党に有利であろうという一般的な予測に反し、ダエラ・レベルでも4大政党はその支持率を増加させた。これは PNI、マシュミ、NUが伸び悩みを示す一方、PKI が各地方で大幅に支持を増加させたことによるものである。

西部ジャワのみならずジャワ各州におけるPKIの大幅な伸張に警戒心を抱き始めた他の3大政党は、中央レベルでの激しい抗争関係にかかわらず、地方レベルでは PKI を封じ込めるために共同歩調をとるという気運が生じ、この傾向は西部ジャワにおいて特に顕著であった。同地方でのこうした動きは、PKI躍進によるもっとも大きな痛手を蒙ったPNIの右派指導者オサ・マリキ (Osa Maliki) らによって推進された。また地方選挙直後の9月、NU西部ジャワ支部はバンドゥンで大会を開いた。同党指導部の中ではマシュミ寄りの立場をとるイドハム・ハリド (Idham Chalid) 委員長も出席した同大会において、西部ジャワの政治情勢に鑑み、NU、PNI、マシュミは緊密に協力しあうべきであることが確認された。さらには前年暮に崩壊したスカルノ＝ハッタの二位一体性の復活、ならびに可能な限りの地方自治拡大の要望が中央政府に提出された^(注50)。マシュミあるいはカトリック党も同趣旨の声明を既に出していた^(注51)。

しかしながら、西部ジャワにおけるこうした3党協力による対 PKI 作戦も一貫して歩調がそろったわけではなく絶えず動揺がみられた。たとえばオサ・マリキら右派による反共の動きに対し、

第12表 西部ジャワ地方選挙結果(5ダエラ別)：()は1955年総選挙結果

	PNI	マシュミ	NU	PKI	4大政党 代表率	その他	計
バンテン	17.4(16.6)	34.4(35.8)	13.2(13.4)	5.0(1.4)	70(67.2)	30.0	100
ジャカルタ	20.3(21.1)	21.4(24.4)	7.5(8.0)	16.5(10.1)	65.7(63.6)	34.3	100
ボゴール	22.3(24.4)	32.2(32.2)	7.5(8.3)	13.0(6.4)	75.0(71.3)	25.0	100
プリアンガン	19.3(20.5)	25.1(24.8)	8.1(8.5)	22.8(14.2)	75.3(68.0)	24.7	100
チレボン	18.6(24.3)	23.0(21.9)	12.7(12.3)	23.1(11.6)	77.4(70.4)	22.6	100

(出所) *Daftar Angka Hasil Pemilihan Daerah* (『地方選挙結果統計』, Djakarta, 1958 より算出。

西部ジャワの PNI 指導者の多くは対抗的な動きを示し、PKIに対する警戒同様“マシュミ/PSI過激地方主義者”に対しても協調路線に基づいて対処すべきだとの見解を表明しだした^(注52)。これら PNI 指導者(NUについても類似の傾向が指摘できる)の態度は、地方レベルにおける PKI 躍進に対する不安感と同時に、中央レベルにおいてスカルノ路線が明白になりはじめた状況の中で、自らの政治的存在意義を確保しておきたいとの考慮が働いた結果であった。いわば大きな政治的潮流の変動期におけるインドネシアの政党の動揺、内部不一致を端的に示すものでもあった。

7. 中央集権化と西部ジャワ政治

1958年2月11日に西部スマトラ、プキティンギで宣布されたPRRI(インドネシア共和国革命政府)は、中央政府の集権化ならびに左傾化を脅威と感じた連邦主義者、反共産党系政党(ことにマシュミ、PSI)ならびにこれに同調する軍指導者により指導された。しかし、PRRI は内部的な分裂に悩まされたこともあり、3カ月をたたずして中央政府、国軍勢力により軍事的に壊滅させられた。PRRI 事件を契機に超議会勢力としてのスカルノ大統領と国軍指導部の権力は著しく増大し、同時にそのことは、危機に瀕していた議会政治に致命的な打撃を与えることになった。とりわけマシュミの有力指導者がこの事件の主役を演じたことは、政党政治そのものの衰退を早めたことに加え、マシュ

ミが第一党であった諸地方の政治にも微妙に影響した。M・ナシール(M. Natsir)、シャフルディン・プラウィラネガラ(Sjafruddin Prawiranegara)、ブルハヌディン・ハラハップ(Burhanuddin Harahap)ら元首相^(注53)を含む有力な指導者が連座したマシュミは、他党、特にイデオロギー的にも支持基盤からみても対極にある PKI からの激しい非難を浴びることになった^(注54)。宿敵政党を国民統合の破壊者と規定する恰好の機会を得た PKI は、かくすることにより中央レベルでの権力中枢に接近し、同時に外島、特にスマトラ西部あるいは西部ジャワといったマシュミの勢力範囲で重点的な組織活動を展開する機会をも得た^(注55)。

ナショナル・レベルにおけるマシュミの地位と影響力が相対的に低下していく過程において、同党内部でも PRRI 評価をめぐる深刻な論争がかわされた。この党内論争においてスキマン(Sukiman)やウィビソノ(Wibisono)に代表される少数派は、PRRI 参加の指導者の行動を中央政府に敵対し党の存立そのものを脅かすものと非難したのに対し、多数派を代表するプラウォト・マンクスサスミト(Prawoto Mangkusasmito)、カスマン・シンゴディメジョ(Kasman Singodimedjo)らは、党が無条件に PRRI を否定することは、革命政府と中央政府を和解させるわずかの可能性をも破棄しざるものであると応酬した^(注56)。また、この党内論争における亀裂は、中東部ジャワ系指導者と外

島（ならびに西部ジャワ）出身指導者間の緊張関係をもある程度反映したものであった。

中央レベルでのマシュミの指導者間の見解不一致は、西部ジャワのマシュミにも波紋を投じた。政治的にも宗教的にも、ナシールその他スマトラ出身指導者に比較的近い立場をとっていた西部ジャワ支部は、幹部会の名において、スカルノ大統領に対し1950年暫定憲法（1945年憲法と比較すると地方分権の理念が基調となっている）を政府が採択するよう要求した。さらに同支部は、スカルノの地方危機の処理の仕方は、むしろ国民統合を妨げる危険なものと攻撃した^(注57)。こうした強い調子の声明は中央政府を刺激し同年7月に、5名の西部ジャワ・マシュミ党員（内4名は国会議員）が逮捕される原因をつくった。この事態の進展はマシュミ中央指導層を硬化させ党幹部は公然とスカルノ批判をはじめ、中央政府との対決姿勢を強めていった。たとえばバタック族出身の党書記長 M・ユナン・ナスチオン（M. Yunan Nasution）とミナンカバウ族出身の幹部党員イサ・アンシャリイ（Isa Anshary）に代表された党中央は、スカルノ＝ハッタの二位一体性の復活こそが地方危機を回避できる唯一の方途であると主張し、それなしには中央集権的な1945年憲法導入には断固反対するとの声明を出し^(注58)、スカルノの掲げる理念と真向から衝突することになった。

有力イスラム政党マシュミと中央政府間のこうした反目は、結果的にはマシュミの政治的孤立化をまねき、中央レベルでの政治は超議会勢力の主導権下で再編成が進められることになった。スカルノと軍指導部は、マシュミ（とPSI）をPRRIの主役と規定しその骨抜き化をはかった。またPKIはもちろん他の主要政党は、それぞれの理由からマシュミと縁切りすることが得策と考えるように

なり地方選挙直後の協調ムードは霧消した。PNIはスカルノの恩寵を得ることを第一義とし、NUもイスラム界で主導権を握る好機と考えていた。こうして3大政党の間には（程度、質の差異はあっても）反マシュミの気運が支配的となった。党派間の権力闘争的、イデオロギー的対立契機が比較的薄い地方レベルにおいてすら、マシュミは新しい政治状況の編成過程から疎外されていった。西部ジャワにおいては、マシュミが混迷を続ける一方、これと対照的にPNI西部ジャワ支部は、政党簡素化、指導民主主義導入に賛成の立場をとることにより、新しい権力状況にいち早く自らを適応させていった^(注59)。

PRRIによって頂点に達した総選挙以降の政治不安はジャカルタの中央指導層の危機意識を過度に高めた。分裂回避、国民統合を希求する路線がスカルノにより推進され、スカルノは軍ならびにPKIという基本的には左右を代表する勢力に後押しされていた。1959年になると、スカルノ大統領は政党内閣制を廃止し強力かつ安定的な中央集権制に移行するための憲政基盤として、1945年憲法導入を決意した。同年7月5日、迂余曲折の末、スカルノは大統領令をもって制憲議会を解散し、1945年憲法を導入した。

一連の権力集中化過程は、必然的に地方自治権の制限を意味した。1957年法律第1号、同年の地方選挙等により一時は拡大の方向にあった地方自治権もその後の政治発展の中で尻つぼみになっていった。1958年半ば、内務大臣は、地方議会、地方政府に対し国政問題を論議の対象とすることを禁止したが、かえって一部地方からの強い反発を呼びおこした^(注60)。西部ジャワにおいても州議会議長が、「州議会議員が国家的諸問題を論じてはならないとするいかなる法的根拠も存在しない」

と抗議を行なった^(注61)。だがこうした声は、指導制民主主義が制度化していく中において、ほとんど黙殺された。

1945年憲法導入後の中央集権化の動きが、いかに急速であったかは、第1期スカルノ内閣で内務大臣をつとめたイピク・ガンダマナ (Ipiq Gandamana) の姿勢変更に端的に示されているとあって良い。スンダ族出身、元西部ジャワ知事ガンダマナは、入閣に際し「内務大臣として、早急かつ実効的な解決を要する多くの問題に当面している。分権化と自治拡大を通して地方を満足させることもその一つである」と述べた^(注62)。内相として地方的利益と国家的目標との接点を見い出そうとしたガンダマナであったが、数カ月後には、そうした姿勢との訣別を行ない、『中央と地方の妥協』によってではなく『安定した中央政府の指導』の下に国民的統合を目指す次のような声明——1957年法律第1号は指導民主主義の原則に一致せず、まだ指導民主主義の下で想定されている調和をも保障しない。さらに同法は安定した、かつ、能率的な政府にとって重要な条件である地方首長を低い地位にとどめている。45年憲法復帰、指導民主主義移行の中で、われわれが永年待ち望んだ安定と能率を保障する制度に代えられるべきである^(注63)——を出すにいたった。

(注1) 1961年センサスに基づくジャワの人口は全体の約65%であることに留意。Nugroho, *Indonesian Facts and Figures*, Djakarta: Terbitan Pertjabaan, 1967, p. 61. (1930年センサスにおいてもジャワ人口は全体の68.7%を占めている。)

(注2) 政治ないし文化的脈絡において、アリランは「明白なかつ自覚的な社会文化的諸グループ」として理解されよう。詳細については Geertz, C., *The Religion of Java*, Glencoe, Free Press, 1960. またアリラン別の政党分類については Hindley, D., "Alirans and Fall of the Old Order," *Indonesia*,

No. 9 (April 1970), p. 26参照。

(注3) ダエラは次の三つの意味で使用されている。1. 領土, 地方, 2. 環境, 3. 地域。Echols, J. and H. Shadily, *An Indonesian English Dictionary*, Cornell Univ. Press, 1963, p. 73.

(注4) Haar, ter, *Adat Law in Indonesia*, NY, Institute of Pacific Relations, 1948.

(注5) 行政単位としての西部ジャワ(州)は1926年に生まれたものであるが、それ以前、ならびに日本軍政期1945年には理事州が行政の最高レベルであった。1950年代において理事州長官は住民に対し直接に権威をもつことはなかったが、プバティ(県長)、市長の調整、監視役的機能を果たした。Soemardi, S., *Regional Politicians and Administrators in West Java (1956): Social Backgrounds and Career Patterns*, Cornell Univ. M. A. Thesis, 1961, p. 11; Smail, J., *Bandung in the Early Revolution, 1945-46: A Study in the History of the Indonesian Revolution*, Cornell Modern Indonesia Project, 1964, p. 163.

(注6) 植民地時代に二つの歴史的にも重要な蜂起が、この地方で起こったことは興味深い。1888年のバンテン蜂起は、サルトノの研究では、西欧支配に対する社会的抵抗と表現され、20世紀民族運動の先駆的役割を果たしたと評価されており、その主要な担い手は伝統的、宗教的価値観に支えられたイスラム農民であったとされている。Sartono, *The Peasants' Revolt of Banten in 1888, Its Conditions, Course and Sequel; A Case Study of Social Movements in Indonesia*, Gravenhage, Boeken Steendrukkerij, 1966, p. 317.

また1926—27年の共産党蜂起においても、同地方のイスラム勢力の存在に十分留意し、その指導者は「宗教的にオーソドックスなイスラム国家として代表される新土侯国の建設」を主張した。また341名の幹部党员の内、145名がハジだったことも記録されている。Benda, H., and R. McVey, eds., *The Communist Uprisings of 1926-27 in Indonesia, Key Documents*, Cornell Modern Indonesia Project, 1960, pp. 60-61.

(注7) ハイルル・サレー (Chaerul Saleh) に代表されたタン・マラカの後継者たちは、マラカの急進主義をうけつぎ、1949年11月半ばには円卓協定の条件を

拒否し、独立のために徹底抗戦する目的で Tentara Rakjat (人民軍) を創設した。Feith, H., *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*, Cornell Univ. Press, 1962, p. 55.

(注8) Parki, *40 Tahun Berdjwang* (『闘いの40年』), Bandung, Parki, 1955.

(注9) 永積昭「ブディ・ウトモの成立と発展—ジャワの民族的自覚の源流」(『史学雑誌』第76編第2号)を参照。

(注10) Soemardi, *op. cit.*, p. 42.

(注11) Parki, *op. cit.*, p. 2.

(注12) Smail, *op. cit.*, p. 10.

(注13) Parki, *op. cit.*, pp. 3-19.

(注14) 1955年総選挙結果の公式統計には、75の小政党が記録されているが、このうち26党が、その基盤(全投票の20%以上)を西部ジャワにおいている。*Daftar Hasil Pemilihan Umum* (『総選挙結果統計』(インドネシア情報省: 1956年)より)。

(注15) Soemardi, *op. cit.*, pp. 83-87.

(注16) Lev, D., *Transition to Guided Democracy; Indonesian Politics, 1957-59*, Cornell Modern Indonesia Project, 1966, p. 95.

(注17) Feith, *op. cit.*, p. 127.

(注18) Lev, D., "The Political Role of the Army in Indonesia," *Pacific Affairs*, Vol. XXXVI, No. 4 (Winter 1963-64), p. 359.

(注19) Lev, *Transition...*, Chapter 2.

(注20) 1957年4月より1964年9月まで、内相のポストをスンダ族が占めたことは中央集権化体制において、中央政府が西部ジャワの動向に十分留意したことのあらわれともいえよう。

(注21) *Pikiran Rakjat*, 11 April, 1957.

(注22) 職能団体代表者を含めると全体の40%以上はジャワ族出身者であった。Lev, *Ibid.*, p. 27.

(注23) インドネシア政治指導層に関する資料的価値をもった研究は数多くないが、その代表的なものとしては次のものがある。

(1) Soemardi, Soelaeman, "Some Aspects of the Social Origin of Indonesian Political Decision-Makers," in *Transaction of the Third World Congress of Sociology*, London, International Sociological Association, 1956.

(2) Yasunaka, A., "Basic Data on Indonesian Polit-

ical Elite," in *Indonesia*, No. 10 (Oct. 1970), pp. 107-142.

(注24) この限定化は、実質的な影響力をもつ政治指導者を欠落させそうでないものを包含する可能性をもつものであるが、政治指導層の基本的トレンドをみる上で大きな支障とはならないと考えられる。

(注25) 立法機関の議員は必ずしも党内において影響力をもつとはいえない。実際には、影響力ある指導者が、立法機関の背後から党に影響を与えていることがしばしばある。

(注26) Willner, A. R., *The Neo-traditional Accomodation to Political Independence: The Case of Indonesia*, Princeton Univ., Center of International Studies, 1966, p. 255.

(注27) このことは、社会主義の洗礼を受け、国際的な視野も十分有していたイワ・クスマ・スマントリにもみうけられる。

(注28) Schils, E., "Political Development in the New States," *Comparative Studies in Society and History*, Vol. II, No. 3 (April 1960), § 2.

(注29) シリワンギ師団の創設、その発展については、Sedjarah Militer Kodam VI Siliwangi (シリワンギ第6軍管区軍史) 編さん委員会による *Siliwangi Dari Masa Kemasa* (『シリワンギ管区の変遷』), Fakta Mahjuma, 1968 を参照。

(注30) Anderson, B., *The Pemuda Revolution*, Cornell Univ. Ph. D. diss., 1967, pp. 342-343.

また、シリワンギ出身の有力軍人で、西部ジャワとの関係も強いものとして、ナスチオン (A. H. Nasution, バタック人) のほか、ダルソノ (Dharsono, 西部ジャワ育ちのジャワ人)、ケマル・イドリス (Kemal Idris, ミナンカバウ人)、イシャク・ジュアルサ (Ishak Djuarsa, スンダ人)、スワルト (Suwarto, ジャワ人)、ウマル・ウイラハディクスマ (Umar Wirahadikusumah, スンダ人)、ウイトノ (Witono, ジャワ人)、アミル・マフムッド (Amir Mahmud, スンダ人) 等がいる。Hindley, D., "Alirans and the Fall of the Old Order," *Indonesia*, No. 10 (April 1970).

(注31) 著名な知識人である T・アリシャバナ (西スマトラ出身) も、1957年3月、ブキエティンギにおいて「中央政府は、統一の名の下にオランダ植民地政府と同じ集権化を行なっている」と政府に対する不信の念を表明し、当時のスマトラにおける不満を代弁した。

Alisjahbana, T., "The Grievances of Regions," Feith, H. & L. Castles, *Indonesian Political Thinking 1945-1965*, Cornell Univ., 1970, pp. 321-325.

(注32) 1950年代にはいると、西部ジャワで、文化運動が活発になったが、その主なものとしてポゴールを中心とするスンダ・ブダヤ (Sunda Budaja), バンドゥンを中心とするパンガウバン・スンダ (Pangauban Sunda) が結成された。その後この二つは合体しバンドゥンに本部をもつダヤ・スンダ (Daja Sunda, スンダの力) という組織に衣更えした。さらに1956年5月には、イワ・クスマ・スマントリの指導下でスンダ団体の調整機関であるスンダ・ムシャワラ協議会 (Badan Musjawarah Sunda) がジャカルタに設置された。Wangsamihardja, R. Atoeng, *Sedjarah Singkat Pasundan* (『パサンダン略史』), Djakarta, 1972, pp. 7-16. (未刊行原稿)

(注33) Wangsamihardja, *op. cit.*, pp. 16~17.

(注34) *Sikap*, Vol. IX, No. 34 (3 Sept., 1956).

参考資料として、西部ジャワにおける主要な行政首長、ならびに高級軍人の種族構成をみておきたい。なお、資料は、コーネル大学モダン・インドネシア・プロジェクト所蔵のカードによる。(データは不完全であるが、一般傾向を知るには十分であろう。)

西部ジャワ主要行政首長の種族構成

対象期間	スンダ族	非スンダ族	合計	スンダ族比率 (%)	
知事 (含副知事)	1957-69	10	0	10	100.0
市長	1966-68	13	4	17	76.5
市長	1958-68	50	12	62	80.6

西部ジャワ陸軍指導員の種族構成

対象期間	スンダ族	非スンダ族	合計	スンダ族比率 (%)	
(軍司令官) レベル					
KODAM (軍管区)	1960~69	2	2	4	50
KOREM (大分区)	1961~67	13	6	19	68
KODIM (分区)	1960~68	53	12	65	82
(参謀その他)					
KODAM	1958~68	79	27	106	75
KOREM	1958~69	18	12	30	60
KODIM	1960~68	26	9	35	74

(注35) *Ibid.*

(注36) 後年(1958年8月), スカルノはスンダ・ムシャワラ協議会の婦人たちに対し、スンダ青年戦線事件をふりかえり「個人として、私は心を痛めつけられたが、かれらを許すことができる。だが大統領として私はかれらの誤りを許すことができない。」と語った。Wangsamihardja, *op. cit.*, p. 17.

(注37) *Java Vode*, 10 Oct., 1956.

(注38) *Sikap*, *op. cit.*

(注39) Wangsamihardja, *op. cit.*, pp. 13-16.

(注40) *Pedoman*, 29 Oct., 1956.

(注41) この点に関しては“Civil”ならびに“Primordial”意識という概念を用い分析を行なった次の論文を参照 Geertz, C., *The Integrative Revolution*, in Geertz ed., *Old Societies and New States*, Free Press, 1963, § I.

(注42) この時期は、北スマトラ、東インドネシアにみられたように州再分割の動きが目立った。西部ジャワにおいても(暫定)州議会内のマシュミ, PSII, ムルバ党議員から、西部ジャワ州再分割が提議された。*Sin Po*, 25 January, 1957.

(注43) Lev, *op. cit.*, p. 84.

(注44) *Ibid.*, p. 85.

(注45) アイディットがスカブミで行なった演説はこの期における PKI の日常活動を良く示すものである。「ある人々は、PKI の戸別訪問による遊説方式を批判している。こうした方式は全政党に与えられた権利であり、他党もわが党支持者に影響を及ぼす完全なる権利を有している。だが PKI を中傷したり非難したりすることは逆効果である。……最近の選挙(地方選挙)は、わが党を激しく攻撃すればするだけ失った票は大きい、ということを示した」。Review of Indonesia (PKI 英語版誌), Vol. IV, No. 8 (August 1957), pp. 20-21.

(注46) この時期における PKI の性格、戦術を詳細に分析したものとして、Hindley, D., *The Communist Party of Indonesia 1951-1963*, Univ. of California, 1964, 特に第19章を参照。

(注47) Van Der Kroef, *The Communist Party of Indonesia*, Univ. of British Columbia, 1965, pp. 90-95.

(注48) *Review of Indonesia*, Vol. IV, No. 6 (June 1957).

(注49) アバンガンを含むジャワの三つの社会文化グループ(アリラン)についての古典的解釈として、Geertz, C., *The Religion of Java*, Free Press, 1960, p. 5 より社会学的な理解として Hindley, D., *op. cit.*, pp. 25-26.

(注50) *Keng Po*, 24 Sept., 1957.

(注51) *Pikiran Rakjat*, 24 July, 1957.

(注52) Lev, D., *op. cit.*, p. 116.

(注53) 首相在任期間は M・ナシール1950年9月～1951年3月。B・ハラハップ1955年9月～1956年3月。

(注54) 他方、マシュミは、1954年12月の第7回党大会で、PKIを明確な敵と規定した。Noer, D., *Masjumi; Its Organization, Ideology, and Political Role in Indonesia*, Cornell Univ. M. A. Thesis, 1960, pp. 193-202.

(注55) 西スマトラはマシュミの最大の基盤である一方、1926—27年の同地方での共産党蜂起、あるいは民族主義運動における鉄道組合を中心とするPKIへの組織的支持にみられたように、共産党が活動しうる基盤をも伝統的にもっていた。また4節の第9表でみたように、西スマトラ、ミナンカバウ族は、PKI内部で比較的有力な発言力をもっていた。(この点に関し注6を参照。)

(注56) *Pikiran Rakjat* (バンドゥンで発行の日刊紙) 17 July, 1958. Lev, *op. cit.*, pp. 136-137.

(注57) *Pikiran Rakjat*, 17 July, 1958.

(注58) *Ibid.*, 24 July, 1958, 4 May, 1959.

(注59) *Ibid.*, 12 November, 1958.

(注60) *Ibid.*, 8 May, 1958.

(注61) *Ibid.*, 8 May, 1958.

(注62) *Ibid.*, 20 July, 1959.

(注63) *Ibid.*, 10 September, 1959.

む す び

以上、本稿は「国民統合」を希求するインドネシアが直面する最も重要な課題の一つである中央対地方の関係を、西部ジャワを事例として考察してきた。

すでに見てきたように、西部ジャワは首都に隣接する(正確には首都をつつみ込む)行政的、地理的単位であるばかりでなく、インドネシア第2の人口をもつスダ族の社会として独自の歴史と文化を有するいわば「政治文化的」単位(エンティティ)でもある。したがって、今後の西部ジャワ、スダ族社会の変化の方向、仕方は、中央政治の将来にとっても大きな意味、影響力を持つものでもあ

る。

こうした点を考慮しつつ、今後われわれが同地方を中央レベルとの接点において政治的側面から展望し、分析していく際、少なくとも次の2点が重要な課題となろう。第1に、「国民統合」あるいは「近代化」と呼ばれる過程の中で、エンティティとしての西部ジャワ、スダ族社会の忠誠心の方向にいかなる変化が生じるのか、あるいは生じないのか。第2にサントリ色の濃い、相対的に、安定的、同質的な政治文化を有する同地方に、社会内外からの変化要因がどのような衝撃を与えていくのだろうか。特に社会に定着しているかに見える伝統的な持続要因に対し、イデオロギー的契機はいかなる作用を与えていくのか。

(動向分析部)